

視点

高校が生徒の貧富を選別し若者を分断している

●インタビュー
青砥 恭 明治大学講師・埼玉大学講師
「彩の国 子ども 若者支援ネットワーク」代表理事



あおと・やすし ●1948年生まれ。明治大学法学部卒。元埼玉県立高校教諭。教壇に立ちながら教育法や教育社会学、教育方法に関する論文を数多く発表。若者の貧困についての研究も独自に進め、2010年に「彩の国 子ども 若者支援ネットワーク」を立ち上げた。

大きな社会問題となっている貧困問題。大学入試の小論文でも頻繁に取り上げられるテーマだ。受験生に貧困問題の理解を問うことは、受験生の社会的な関心の深さを知るのに有効なのだろう。なぜ、貧困は社会的に大きな問題となるのか。貧困問題の根底にある問題の核心は何なのか。この問題の本質的な理解が、入試対策としても、社会人になるためにも、今の生徒には必要だと思われる。

そこで、貧困に苦しむ若者の実態を描き出した『ドキュメント高校中退』（ちくま新書）の著者、青砥恭さんに会った。貧困は連鎖して若者を分断し、放置すれば階級社会になっていくという指摘は、この問題を考える上での重要な視点になると思われた。

実態が現れていない中退率 生徒の減少率はもっと高い
——『高校中退』を著そうと思ったキッカケは何だったのですか？

青砥 2008年にNHKに取材を受けたことですね。僕は埼玉県の公立高校の教師しながら、10年以上前から貧困家庭の若者について研究していて、独自調査で高

貧困を背景に中退する生徒が増え続けた
——高校を中退する生徒は以前から少なからずいたし、中退者の多い高校も以前からあったのでは？

青砥 確かに中退者の多い高校は前からありました。しかし、今のよう

にひどくはなかった。簡単に言えば、1990年代の後半から、特にここ10年の間に中退者の家庭の事情が大きく変わったんです。かつての高校中退は、生徒が自らやめるケースが多かった。『やんちゃ』をやって「面倒くせえ」と言って去っていったんです。

でも、バブル経済が崩壊して不況に入り、同時に労働の規制緩和が進んで非正規雇用者が増えるようになると、だんだんと貧困を背景にした中退者が増えていったんです。簡単に言えば、家庭の貧しさで勉強どころではなくなり、落ちついて高校に通学できない生徒が多くなったんです。

校中退率と授業料減免率の相関関係を浮き彫りにしたのですが、そのデータにNHKのA記者が興味を持ったんです。

そのデータは2000年に日本教育法学会の雑誌で載せたもので、明らかに貧しい家庭の子どもが一部の高校に困り込まれていて、少なくない生徒が中退しているんです。おそらく、その後は親と同じような貧困生活を送るようになって

いる。NHKのA記者は、高校生が学校をやめる理由は学力や意欲の不足だけではなく、他にも原因があるのではないかと考えていたので、私のデータを見ながら「この調査をもう一回作ってもらえないか」と依頼してきたんです。それで、再びデータを集めたんですね。

A記者は、「実際に中退した生徒たちの話も聞きたい」とも要望してきて、僕も生徒の中退後の実態をつかみたかったので、聞き取り調査を始めた。高校中退者を見つけて話をしてもらうのは大変でしたけど、幾人かの教師から協力を得て、高校中退者に会えました。そのうち、この実態は報道だけでなく記録としても残したほう

がいいと思うようになったんです。

高校を中退した多くの貧しい家庭の生徒たちは、自分たちの苦境を社会に訴える力がないんですね。言葉で表現する力も、法律を活用する知恵もほとんどなく、自分の存在を示せないから、社会からの関心も集められない。見捨てられたままになってしまふ。だから、ますます苦しい状況に追い込まれる。「高校をやめるとアルバイトでも雇ってくれない」「まとも

に食ってない」と語る彼女らに話を聞いていて、僕が代わりに声を出せないかと思ったんですね。少しおこがましいかもしれませんが、けれど、彼らが出したくても出せない声を僕が代弁したい。それで本になったんです。出版すると予想以上の反響でした。増刷を繰り返すほど売れるとは思っていません

——その高校中退の調査で、どんなデータが出て、高校中退者のどんな実態が浮き彫りになったのですか？

青砥 文部科学省が発表している中退率は、実態を反映していません。約2%と文科省は発表していますが、この数字は学校全体の

中退率を各年度で算出したもので、用

の機会を増やす面もありますが？

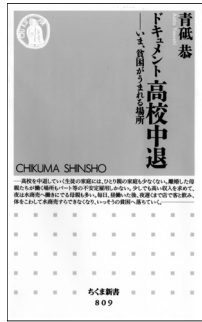
青砥 すべて、競争を否定するつもりはありません。ただ、競争を社会制度に取り入れて成り立たせるためには、十分なセーフティネットが必要です。

今の日本社会には、この安全網が足りな過ぎる。そこが問題なんです。セーフティネットがあっても、穴だらけなのに、競争原理だけを強く働かせてしまったのが、現代の日本社会です。



規制緩和で競争しやすい環境を整えることは、経済成長を促し、雇

用



『ドキュメント 高校中退』(青砥恭平著)の表紙。高校中退した子どもたちの生活や、貧困問題の核心を考察している。

いいんです。見えざる手が動いて、選ばれた者だけが生き残るでしょう。国家がわざわざこの競争を煽ったり、加担する必要はありません。財政政策や経済政策はもろろん大事ですが、国として第一にすべきことは、国民が競争に公平に参加できるようにカバーしたりフォローしたり、行き過ぎた競争に規制をかけることです。ルソーの社会契約説を持ち出すまでもなく、セーフティネットの基盤整備をすることこそ、国の仕事なんです。

修学旅行を取るか 食費を取るかという選択

——どんなセーフティネットがあれば良いと思いますか？

青砥 日本のセーフティネットは、実質的に公的扶助しかないのが問題です。極端に言えば、生活保護費という名のお金をバラまくだけなんです。

お金だけあげても、貧困で苦しむ人は自立なんてできませんよ。もっと誰かが寄り添って自立できるように支援しないと、立ち上がる力が出てこない。

子ども手当てや授業料無償化についても、反対ではありませんが、

それだけでは貧困の連鎖を断ち切れない。お金と人的サービスをセツトにする政策が今必要です。

僕は、高校の教員を辞めて、新しい活動を始めることにしました。貧困で苦しむ子どもや若者に寄り添いながら支援するサービスを、埼玉県の全域で展開するんです。国の予算が付いた埼玉県のモデル事業で、「子ども・若者支援ネットワーク」という組織を作って、学校などの教育行政と福祉行政と地域が情報を共有し、公的扶助と人的サービスを一体化して、貧困層の子どもや若者、その親を支援するんです。

学校は、子どもや若者の家庭がどんな状況にあるのかが分かりやすいところですが、親からほとんど見捨てられた子どもがいると分かってても生活保護につなげるなどのソーシャルワークがなかなかできない。また、福祉事務所のケースワーカーは、いつも100以上の案件を抱えていたりするから、子どもの教育のことまで考えられないのが実情です。

教育行政と福祉行政の間をつなぐ組織を作り、地域に住む人々の力も借りて、どうすれば貧困問題

護者に好評でした。その話を底辺校の先生に聞かせて「やってみたら？」とすすめたことがあります。すると「うちはリゾートホテルに泊めさせてやりたいな」と言われました。その生徒は社会に出れば食べるのに精一杯で、リゾートホテルに泊まるという経験は一生で一回かもしれない。だから、そんなホテルに泊まらせてあげたい。もっともだと思いました。

取材で多くの高校中退者に会いましたが、本当に驚いたのは、まともに食事をとれない家庭で育っていることが実に多いことです。そんな若者が集まる高校だから、修学旅行に行くチャンスがあっても、「この旅費の10万円があれば3か月は食える」と、出発する直前で修学旅行を断念する生徒が続出するんです。おもしろくないから行かないのではなく、「この金で3か月は食える」と思って諦めるんです。

日本社会が今、階級社会になりかけている

——貧困問題を放置すると、どのようなことになるのでしょうか？

その一方で、学校によっては1週間も海外に行く修学旅行もある。日本の社会の同じ17歳や18歳の高校生なのにね。切ないと思いませんか。やっぱり、底辺校の生徒たちは可愛そうですよ。本人の努力を論じる前に、食うために修学旅行を諦めさせる社会を変えるべきだと思ふ。もはや教育問題ではなく、社会政策の問題なんです。

青砥 子どもたちが日本社会の中で分断されるでしょう。中等教育というものは、本来、安定した社会をつくるために、層の厚い中産階級をつくるのが目的だったはずなんです。しかし、今の中等教育は、貧富によって、選別する道具にされています。同じ日本社会の中で暮らす子どもなのに、選別されてお互いに違う世界の人間として生きていくんです。

親の職業や階層が違うというだけで交わらない子どもの数が増え、やがて大人になっても交わらず、富裕層と貧困層がそれぞれ次の世



を解決できるか一緒に考え、教育と福祉のサービスを同時にセットで提供していく仕組みが必要だと思います。個別のケースに合わせて、公的扶助と人的サービスを効果的に組み合わせ、安定した子育てときちんとした教育が受けられるようにしたら、貧困の連鎖が断ち切れるかもしれません。

——高校を中退した若者を取材していて、どう思われましたか？

青砥 極めて理不尽だと思いました。生まれてきた家庭が貧しかったというだけで、学ぶ楽しさを知

代を再生産します。これはもう階級(分裂)社会ですよ。私たちは本当に、こういう社会を作りたいと思っているのでしょうか。もし階級で分断される社会になったら、今よりもっと社会秩序や社会保障費でお金がかかるようになりますよ。貧しい人たちは常にストレスを抱え、社会が荒れやすくなり、犯罪や疾病が増えるでしょう。「貧しいのは本人の努力が足りないからだ」と放置すれば、続出する社会問題を解決する後始末に多くのコストがかかるようになります。

日本社会は今、大きな分岐点に立っています。別に労働者が資本家を打倒するような革命は必要ありません。単に地域の中で暮らすいろいろな人が協力し合ってコミュニティができればいいんだと思うんです。

——青砥さんは、高校がどんな学校であってほしいと思いますか？

青砥 学校というところは、この社会をより良くする人を育てるところです。先生や生徒同士の感情交流を通して、この社会や国を良くしていくこうとする気持ちを育てることが、学校に課せられた一番大

ならず、幸福感をほとんど感じることもなく、「楽しいことなんて1つもない」と思いつつ大人になっていくという若者が、今の日本の社会には多くいるんですよ。かつて、勤務していた中レベルの学力の高校で、僕は修学旅行の企画を立てたことがあるんです。沖繩に行って民家に泊まり、生徒はそのうちのおじいやおばあと一緒に生活をして、いろいろな話を聞いたり交流するという旅行で、実行してみると観光ではできない貴重な経験ができた、生徒や保

切な使命なんだと思います。今の学校、特に高校は競争原理が強くなり過ぎています。切磋琢磨して勉強することも大切ですが、学力競争に重点を置き過ぎれば、生徒同士が敵対関係になって、感情交流ができなくなります。もう一度、高校って、学校って何をするといいかなんだろうと考えたほうがいいと思います。

私が取材した若者たちには共通点がありました。それは、頼りにする大人が周りにほとんどいないということ。サポーターがまわらない子どもたち。この子たちが学校や地域で一人でもいれば、彼らの人生は変わるはずなんです。

学校や地域にいる大人は、貧困に苦しみ高校を中退していく子どもたちを邪魔にしないで、つながってほしい。ぜひ、そうして欲しいな。そんな感情の交流から子どもや若者は本当のやさしさを学び、他の人にもやさしくなっていくます。もう一度、人と人がつながりを回復して、地域社会を立て直すことが、この日本では最も重要なことだと思いますし、高校が果たせる役割も大きいでしょう。